

中村哲



インタビュー・撮影＝渋谷陽一

現地の人みんな、NGOというのは一種の詐欺師の団体であると思ってるんですよ

——前回、中村先生には、いわゆる日本の報道と実際のアフガニスタンの現実との落差というところですか。貴重なお話をうかがって、読者からも大反響があったんですけども、今回は、世間が戦後復興一色のなか、その戦後復興の問題と、それからあの一連のテロからアメリカの空爆に至るものは一体なんであつたのかということですね、まあ、中村先生なりの皮膚感覚と視点でお話をいただければと思うんですけども。まず、今、一応タリバン後の政権ということで暫定政権が作られたわけですけど、現地の人にとってあの暫定政権というのはどういう認識で捉えられているんですかね。

「そうですね、まあ、一般の人たちにとっては雲の上の出来事だというのが実態でしょうね。もう少し言えば、アフガン人というのは非常に独立性の強い国民で、今まで外国軍に擁立されて続いた政権はないですね。その意味で、今回は英米の軍事力を背景に成立したわけですから、強烈な拒絶反応をもって迎えられるというのが、普通の人の感覚ですね。それに、今流されている映像とかニュースなどは、すべてカーブルあるいはその近辺だけですね。だから、アフガン全体の実態としては、ほとんど無政府状態ということですね。現に私自身も一月

に現地まで行ってきましたけども、東部の比較的暖かい地域でさえも旱魃による餓死者というのがかなり出ている。しかも、あれだけ治安のよかつたアフガニスタンが、今夜盗強盗の巣窟で、食糧輸送にしても途中で消えてしまっている。まあ、そういう事態を考えるとみますと、今度のこの米軍の空爆というのは、直接的な死者がニューヨークのテロ事件を上回る四千数百名出たというだけではない、それによる政治混乱で餓死者が一〇〇万人以上出るかもしれない状態を作ってしまったわけですね。その責任を現地は問うだろうし、答えざるを得ないと私は思いますけどね」

——じゃあ、ある意味、アフガンの九〇パーセント以上を占める農村地域では、暫定政権ができたという認識さえもない可能性もあるわけですか？
「そういうことですね。語弊はありますが、農村の基本構造は変わらずに上澄みか動いているという認識でしょうね。ただ、上澄みが動くにしてもタリバンのほうがまだよかつたというのが一般的な認識なんです。少なくとも治安でどうこうという問題はなかつたから。特にパシュトゥーン系の民族が主体の地域では、北部同盟の兵隊さんに給料が出てないために、その分が略奪によって補われているという現実があつて。こうなるとやっぱり略奪されるほうは面白くないですから。だから

士や元々北部同盟にいた職員なんか聞いてみると、今はタジクやパシュトゥーンがお互いに争っているけれども、あれは兄弟喧嘩みたいなもんだと。外国人が入ってくれば、また別だということをはつきりみんな言いますよ。ということ、隙があれば駐留軍は誰から撃たれても全然不思議ではないんですよ。実際、私が行っているときにも、米兵が二人狙撃されて一人が死んで、一人が怪我をしたんですが、元タリバンの兵士が反タリバンの傭兵として雇われて、アメリカに武器と金をもらったあとに米兵を撃つという

——ああ。
「部族対立にも米軍は利用されてきてね、あれは常に爆撃機が上空を回っていてですね、そして地上にいる通信員がどこどこにアルカイダの部隊を発見したって連絡すると、すぐ来て爆弾を落とすと、そういう仕組みになっているんですが、そのついでにですね、自分の敵と思える人がいる場所を指示してですね、そこを爆撃させると。そういうことが起こっているんですよ。誤爆のほとんどは、そうやって起きてるんですよ。だから、私たちが現地に安全に出たり入ったりできるのも決して正規の入り方ではなくて、部族とか地縁・血縁を頼りに入っていきまますから、だから安全なんです。そのへんの感覚というのは恐らく外国人にはわからないものがあると思いますね」

THE BEGINNING OF THE DECLINE OF AMERICA

「部族対立にも米軍は利用されてきてね、あれは常に爆撃機が上空を回っていてですね、そして地上にいる通信員がどこどこにアルカイダの部隊を発見したって連絡すると、すぐ来て爆弾を落とすと、そういう仕組みになっているんですが、そのついでにですね、自分の敵と思える人がいる場所を指示してですね、そこを爆撃させると。そういうことが起こっているんですよ。誤爆のほとんどは、そうやって起きてるんですよ。だから、私たちが現地に安全に出たり入ったりできるのも決して正規の入り方ではなくて、部族とか地縁・血縁を頼りに入っていきまますから、だから安全なんです。そのへんの感覚というのは恐らく外国人にはわからないものがあると思いますね」

——となると、それこそ空爆によってアフガニスタンをメチャクチャにしたあと、これで悪い奴はいなくなりまして、あなたたちに暫定政権をあげましょう、じゃあそこに我々も援助しましょうという、この欧米的な論理はまったく通用しないってことですね。
「そうですね、もうまったく通用しないですね。ただ、恐らく現地の人としてはですね、正直もう争いには疲れていて、建設的な仕事に飢えてるんですね。だから、政治的な動きやなんかに感わずにやれば戦後復興もどんどんどできるんですけども、その際に、まあアフガンの女性が伝統的に被るブルカが象徴的ですけども、力づくで慣習を変えるようなことをしたり一方的な論理で『いい・悪い』を言ったりとかですね、そういうのをやめないと私は成功しないような気がしますね」
——それこそまあ前回のお話でよくわかりましたけども、女性がみんなブルカを取って自由と民主主義がカーブルに再現したというあの報道というのは、もうより一層嘘であるというのが、目につれて露になってきてますよね。
「で、また、あの当時なぜそんなふうにもみんなに誤って伝えられたのか、それも不思議なんです」
——いまだに朝日新聞なんか、今まで教育が禁止されていた女性のための学校が開かれて、カーブルの女性たちは大喜びをしていますとかつて記事を

ら、パシュトゥーン地域では嫌われているというのが実情ですよ。ただ、じゃあそれでパシュトゥーン対反パシュトゥーンというような図式で括れるかというと、これがまた複雑でして、ユゴスラビアのような民族対立とはまた違う部族対立なんです。極端な話ですが、その一月に行つたときに、反タリバン軍としてトラボラの攻撃に参加したという傭兵の家に行つたらですね、彼のお兄さんがいて、『元タリバン軍の兵隊だ』と。つまり、家に帰れば、タリバンも反タリバンもなくて、一緒に仲良くご飯を食べて、暮らしてるんですよ。こういうふうにはアフガニスタンというのは、地縁・血縁での結びつきというのを非常に大事にしていて、早く言えば、タリバン・反タリバンなんていうのは八百長なんですよ(笑)。少しわかりにくいかもしれないんですけど、これは戦後の日本でもそうだったんですね。今でも覚えてますが、戦後すぐウチの祖父が『これからはアカの天下になる』と。で、当時はアカは悪い奴でことになっていたわけですけど、でも一族が生き延びるにはアカの間がこの中村家にも必要だと、こういう考えだったんですよ。つまり、あの頃の論理ではですね、要するに我らの一族が生き延びることが目的であつて、その手段が共産主義であろうと、ナシヨナリズムであろうと構わないというのが、一般的な日本

人の感覚だったんですね。だから、それと同じですよ。表に出る大義名分としては共産主義とか自由主義とかデモクラシーだとか言いますが、実際にアフガン社会を動かしているのは地縁・血縁なんですよ」

英米への本音

——じゃあ、米を後ろ盾にした暫定政権が、地縁・血縁を主体とするネットワークを行政的な面で確立していくんだけど、今の話を聞いていただけでも、かなり難しそうですよ。
「そうですね、できないというふうには断定はできませんが、かなりの努力は要るんじゃないかと思えますよ。しかも、英米、特に英というのは現地では敵の代名詞なんです。日本で江戸時代に夷狄南蛮と言っていたみたいなんですよ。そして、イギリスのほうも、アフガニスタンに対してアフガン戦争で二度も負けたというコンプレックスがあるんですよ。しかも、そのときも傀儡政権を作つて、ようやく安心してイギリス軍が帰つたその日に反乱が起きて潰れてしまつたというふうな、そんな負け方だったんですよ。だから、恐らく今イギリスはびびってるはずですよ」
——じゃあその再現がまた今回も起きる可能性は大ということですよ。
「大ですね。だから、北部同盟軍の兵

載せてましたけどね。
「それは、昔、ソ連が介入したときもそうだったんですけどね、ソ連は決して、我々の物差しから見ると間違つたことをアフガニスタンの人々に強制しようとしてたんじゃない、女性の権利の拡大、識字率の向上なんかを実施しようとしたんですね。けれど野良仕事で忙しいおかみさんたちを引きずり出して、さしずめ、あ・い・う・え・お・なんかを覚えさせようとした。それでまあ、おかみさんたちは役人に殴られる

**大義名分としては
デモクラシーだとか
言いますが、
実際にアフガン社会を
動かしているのは
地縁・血縁なんですよ**

ぬかもしれんという人たちの暮らしを見てくれと。外相が辞めたとか、政治がどうだとかいう状態じゃないんじゃないかという感じがするんですね。だからまあ日本の一件はともかく、アフガンの庶民も、現時点では国際援助に対して、それと似たような印象を恐らく持つてるんじゃないでしょうかね。日本では、NGOと言うと、なんか政府ができないようなことをする善い団体というイメージがありますが、現地の人にはみんな、NGOというのは一種の詐欺師の団体である(笑)、思ってるんですよ。実際、現地では、NGOという言葉を言うと、非常に悪い響きがあるんです」

——そうなんですか？

「みんながそうとは言いませんけどね。私たちの活動地域でも、ウチの村はこの外国人のNGOを入れないとか、各地域のジルガという長老会議単位で、そういう決定がされてるんですよ」

——それはなぜなんですか？

「それはねえ、簡単に言うと、やってることがとぼけてるからですよ。例えば、具体的なことで言いますとね、西欧的な価値観だけで考えて、これだけ病気が流行るのはアフガニスタンの農村に便所がないせいだと、便所を作っただけで清潔にすれば病気が減るといって、ある国際団体が便所を作る運動を始めます。この地区に便所を一〇〇カ所とか決めて作るわけですね。請け負った現

地の人間は、そんなもの要らないのじゃないながら、まあ作らないとお給料がもらえませんか、しょうがなく作るわけですよ。ところが、なんにもない砂漠の真ん中に便所を作ったりね(笑)、しかも、昔の日本もそうでしたけど、農村では人糞っていうのは貴重な肥料なんです。アフガンでは地中に埋めるといふ習慣はないんです。けれど、そのへんのことと斟酌せずに、西欧的な感覚で、こうしたら清潔になつて病気が減るとか言つて、やつてしまふわけです」

——となると、余計な形で引っかけられるよりは、今の生活がきつちり維持されるほうがよっぽどいい、NGO来なくていいですよっていう感じになつちゃうんですか？

「ええ。ただ、今は大早魃なので、外国人が入りやすくなつていてるんですけどね。そんなことよりも生き延びることのほうが先だというのが、まあアフガニスタンの直面している現実なんです。だから、今は、どんな形であれ自分たちを食わしてくれる人であれば歓迎すると。それが現実的な実感じゃないでしょうかね。そのときにですね、ブルカを剥いだとか、便所をどこそこで作れだとか、そういう話になりますと、食い扶持が増えるからいいとして

も、アフガニスタンの人々は内心せせら笑つてるでしょうね。というの、前回もお話したように、十三年前も似たようなことがありましたから。一九九八年の五月からソ連軍がアフガニスタンから撤退し始めて、それから十カ月で撤退することになるんですけどね、その十カ月の間に押し寄せた国際団体の数といつたら二〇〇〇以上、そのあとにきたものまで含めると三〇〇〇以上のNGOがベシヤワールに集まつて、大雑把な算定では、難民帰還プロジェクトと称して数十億ドルが使われたと言われてるんですね。ところがそれによつて帰つた難民はほとんどいなかったんです。結局、ちゃんと情勢も見極めずにドツと押し寄せて金だけが回つて、じゃあ難民のほうはどうしたかっていつたら、これまたそれをあざ笑うみたいなんです。湾岸戦争の直後の九二年の五月に二〇〇万人が自力で帰つたという実態がある。で、そのときの総括といいますが、反省といいますが、それはほとんどされてないですね。だから、我々が今押し寄せているNGOを、にわかには信じたいというのは、そういう一種のトラウマといいますが、それに近いものがあるわけで、恐らく一般のアフガニスタンの人々もそう思つてるでしょう。だから、現地では、NGOと名乗ると、どこか嘲笑的な態度をみんなから取られるし、国連と聞くとせせら笑うような状況なんです。これは別

に彼らに反西欧的な価値観があるとかいうのではなくて、あのときの実績を見てそうなるわけなんですよ」

——そのとき、そこには何百というNGOが入つたわけですよ。結局、それはどのぐらい残つたんですか？

「そうですねえ、二桁いくかいかないかというところでしょうかね。しかも、別に残つたからいいというわけでもなくて、そのなかで真つ当な働きをしてたというのは、ほんの一指でしようね。だから、今度も私は、にわかには信じないというが、実際に結果を見てみなきゃわからないという感じがする。まあ、我々も、そういうこと言うから嫌われて、孤立してまふけどね。ただ孤立もその、援助する側の間での孤立であつて、現地の人々の間ではむしろ歓迎されてますから。自分で言うのもなんですが、まあ、そこが違うと思うんですけどね。やっぱり地元の人々のニーズを中心に考える、もしもこれが自分の子供だとしたら、私は何をどうするか、あと考えなきゃ駄目ですよ。そう考えると、とても欧米人の手に負えない社会じゃないだろうかと思つてます」

——先ほど、日本の外務省と田中眞紀子氏の例の一件について少しお話がありました。あれなんかは、まさにそれ以前の茶番劇で。僕らはああいうのを見て怒つてるだけなんですけど、でも、きつと中村先生にとっては、ああいうふうな形ですべてが台無しになる

力を脱ぐ自由だとかよりも、明日食わせてくれというのがですね、普通の庶民の切実な願いなんじゃないですかね。だから、我々が実際に会つて英語で喋れるような人は、これはもう上等の階級なんですよ。アフガニスタンを代表してる人々とは決して言えない人たちがいるんですよ。ただ、そういう人たちが説得力をもって迎えられたという部分があるんですね。一般の九九・九九パーセントの人たちはですね、もちろん英語も喋れないし、外国人と接する機会もない。けれど、そういう人たちがアフガン社会つていうのを支えてきたんです」

「NGO」という汚名

——となるとですね、そういう表面的な認識のもとに、これから暫定政権にお金がどんどんつき込まれることになると思ふんですけど、実際アフガニスタンの現場の視点から見ると、どうなんでしょうか。お金がくるのはいいことだと思ふんですけど、それがとりあえず、ああいう経緯でできた暫定政権にいつてしまふという。

「これはちよつと説明に時間がかかるんですけどね、暫定政権といつても別に一枚岩ではないんですね。日本では旧タリバン勢力、あるいはパシチュウーンの民族勢力と、暫定政権の対立という図式で見られがちですけども、

そう簡単なものじゃない。先ほども言つたように、地縁・血縁がすべてなわけ、それは複雑怪奇に入り乱れていきます。だから、暫定政権でも少しづつパシチュウーンが力を持ち始めているのを見ると、これで政権が換骨奪胎されて、一つのまともな政権になり得る可能性もあると思ふんですよ。だから、必ずしも金を暫定政権に注ぎ込むこと自体が悪いわけではないんです。ただ、おつしやつたようにですね、それが正當に使われるかどうかというのは本当に重要なことで、みんなの関心が集中すると思ひます。特に、こんなに飢餓が蔓延して、今年の冬だけで一〇〇万人が死ぬかもしれないというときに、会議で金額が決定されただけで実際に現地で使われてるプロジェクトっていうのはほとんどないんですね。私たちも、これからカールにNGOやODAがどつと押し寄せてくるだろうから、今年度で診療所を五カ所閉鎖してもっと困つた地域へ移す予定だったんです。ところが、住民が『とんでもない！ 今出ていかなくてくれ』というわけですよ。こんなにくさんのNGOがきて、オフィスもいっぱいできて、そのおかげでウチの家賃も十倍になつて、安いところへ移らざるをえなかつたの。よくよく聞いてみると、できたのはオフィスばかりで実際の活動はほとんどないんですね。カール市内でさえ、まともな医療行為が行なわれ

ていない状況なんです。だから、私たちも、ともかく本格的な活動まで時間がかかるだろうから、それまでは続けることにしたんですけどね。そういう現実なんですよ。でも、金額だけ見れば、日本も五億ドルですか？ 会議は成功したと言つてますけども、まあ地元の人々の正直な想いとしては、その金はいつくるのかという感じでしょうね。もつと言え、そういう大金を見せてしまふことで、むしろ飢えた人たちに、そんなにお金があるのになんで俺

たちが飢え死にしないでいいんだという反感を駆り立ててしまふ可能性さえありますよ。だって、実際に私たちは、四千万円で六六〇本の井戸を掘つていてるわけですからね。一本あたり六万円ですよ。そう考えると、金額だけ決めて、あとは日本の外相と外務省のあいだで揉めてるなんていうのは、ほんとに見苦しいと言ひますが、それどころではないという感じがするんですよ。NGOの参加がどうだこうだと言つてますが、まず明日死

恐らく九九パーセントの人は明日どうやって食っていくかと、これが主な関心事だと思いますよ

暴力で脅し、そのあと 金で脅されてるのと 同じですから。 それは、きっと屈辱感を 生み出しますよね

ようなことってというのが日常的にありたりするのかなとも思っただけですが、どうなんですか？

「これはですねえ、現地にいる人間の立場から言うと、もう全然違う世界の次元の違う出来事だと、そういう感じですね。現地から見れば、NGOであろうとODAであろうと国連であろうと、なんでも構わない、とりあえず自分たちを生き延びさせてくれるような政策をやってくればいいのにと、それが本音なわけですから。食糧よりもブルカを取れだとか、その段階でちょっとずれてる人たち同士がなんか争ってららしいという程度にしか見えないと言いますかね。だからNGOの役割だとか言いますが、私たちが心掛けてきたのは、どんな権力とも等距離で付き合おうと言いますか、政治的なことに巻き込まれないようにしてきたおかげで長続きしてきたという面があるんですね。実際、今度の食糧配給を見て私が感激したのはですね、前はそれをタリバン政権の人々が群衆を取り仕切ったりして手伝わってたんですね。それが、今度は北部同盟の人間が代わりにやってくれた。無秩序なこともありませんけども、命を助けるという行為においては北部同盟もタリバンも関係ないんですよ。だから、そういうのを見てると、これはやはり日本より進んでるんじゃないかと思っちゃいましたね」

何をもつて、よくなるという展望を自分のなかで信じられるんですかね。「うーん、これも難しいですねえ。でもまあ、苦しいこともありますけれど、やっぱり向こうで仕事をしてると楽しいですね。と言うと、ちょっと語弊がありますけど、やはり我々がいなければ死んだらもうなという病人を看たり、それによって普段は拗ねてる人たちまで含めて素直に喜んでる、もうその姿になんか希望があるような感じがします。それに自分も励まされてき

「ええ、訴えるものがあるんですよ。

さつき略奪暴行があるって言いましたけど、まあ、そういうことをしてる人たちでさえですね、我々がそれなりのスタッフを送って説得すると受け入れてくれるんですね。自分の村のことも考えてみると、今、死にかけてる人がいるのに協力しないのかと言うと、みんな協力してくるんですね。そういう人たちはねえ、もう字も書けない英語も喋れないという人たちですけども、道徳的なレベルは日本の政治家より高いと思いますね。だから、日本の内部の争いを見てても、これは我々と次元の違う話であって、NGOであろうがODAであろうが、なんでもいから、どうして現地にもう少し目を向けて一緒にやろうという気持ち起きないのか。それが私は不思議なんです」

「今回はいわゆる復興会議に特定のNGOの参加を認めなかったという茶番劇だったわけですけども、例えば中村さんなり、ベシヤワール会なりが過去に政治に関わってきたことによつて感じた確執やずれていくのは、なにかあるんですかね。」

「うーん、そうですね、直接的なこととはともかく、全体を見ても、本当にいい加減なプロジェクトが多かったのは確かです。日本人は盛んに湾岸トラウマとかって言うんですけどね、あのとき現地の人はもっと傷ついたわけ

たということですかね。やはり向こうにいると、もう今の日本で見られなくなつてしまった人間らしい感じというのがあるんですね。ニュースだけ聞いていると、さつき私自身も何百万人死ぬだとか言いましたように、悲劇的な感じがするんですけども、実際、現地行ってみると日本人よりは明るい顔してる。明日食べるものが手に入るだろうかという人でも明るいんですね。しかし、日本に帰ると、まあ失礼かもしれませんが、自分に比べて、ちょっと出ればコ

す。さつき言った、その、砂漠の真ん中に便所を掘るだとかね。地雷撤去にしたって、なぜじゃあこの十数年放つておいたのかというのが正しい言い分だと思えますよ。今はもう住民自身ほとんど自分たちで退けてしまつていて、そして危険地帯はもうみんな知ってるんですね。そういう意味では、今見る復興援助の内容を見ますと、これはあくまで先進国にとつてトピックスになり得ることをやるという、国内向けの顔があまりに強調され過ぎてるという感じがしますよね。お金を貰うほうは援助停止になると困りますから、とやかく言えないですけど、でも、それは初めは暴力で脅し、そのあと『こうしないと助けないよ』って金で脅されてるのと同じですから。それは、きつと屈辱感を生み出しますよね」

「失敗国家」の烙印

「ほんととお話を聞いてみると、実にまっとうな現状認識で、それゆえ現状に対する絶望感も余計に募ってくるんですけども、そのなかで中村先生はまた現地向かわれているわけなんです。その、自分を動かしているエネルギーというのにはなんなんですかねえ。」「なんでしようかねえ(笑)。そうですね、子供が溺れかけてるときに手を出すじゃないですか。まず、そういう単純な気持ちでしょうね。それはまあ

ズンビもあるし、食うに困らないわけですけど、展望があるだろうか？という点では見えないんですね。だから、本当に人間らしい生活っていうのはなんだろうかというところを、現地というのには非常に魅力的なことなんですね。もしかすると、これは失礼な言い方かもしれませんが、私は希望を感じているような気がしますが、世界が崩れてもなんか残るものはなんだろうか考えたときに、それはそういうもののような気がします」

「だから、今のお話が一番重要なことだと思えますが、今回のアフガニスタンに対する行動の欧米の根拠というのには、アフガニスタンという「失敗国家」をどうにかしなきゃいけないんだという、そういう価値観でしたよね。「ええ、やっぱりそれは人間としての礼を欠くと思いますね。この何十年かの混乱というのは、別にアフガニスタンの人が自分たちで作ったことじゃありません。ソ連が勝手に入ってきて、アメリカが勝手に入ってきて、そうやってアフガニスタンはグチャグチャになつていったわけですね。これは私は腑に落ちないです。先進国の人にはアフガニスタンのことを遅れると言いう人もいますけども、我々の社会自体だつて矛盾だとか悩みを抱えてるわけ。なのに理不尽に介入してきて、自分たちとは違ったものを排除する形でやっていくというのは、ちょっと紳士

私だつて、音楽でも聴きながら毎日悠々自適の暮らしをしたいと思わないことはありませんけど。ここで引き下がったら男が廃るというか。ただ、今、そういうこと言うと女性に責められますので(笑)」

「まああの、ここで引き下がる人間としてなんかこう、心残りのようなものが残るんじゃないか、という気持ちに引きずられてきたというのがほんとでしようね。それしよっちゃう訳かれないんですよ、それを続けているエネルギーはなんですか？って。しかしまあ、零細企業の社長の気分にも似てますしね、今まで十何年間も連れ添ってきた人たちをね、ちょっと俺の気分が変わったから、さようならっていうふうには私は言えないですね。まあ、それとやはり、自分たちの続けていることであるんな人が元気が出たり、あるいは本当に命が助かったりとかいうのを見ると『よかつたなあ』と思つて、まあ盆栽弄りよりはやっぱりよかつたか(笑)、思うこともありますよね。そういう単純な気持ちと言いますか、これといった信念はないですね」

「ですが、それは言つても、今のアフガニスタンを取り巻く状況というのは、本当に希望が見つかからない状態じゃないですか。だけど、中村先生としてはよくなると思うからこそ、こういう活動を続けるわけですね。それは

的じゃないという気がします。例えば、インド人が、アメリカ人は牛を食べてるから野蛮な国だつて攻め込むというのとはほとんど変わらないじゃないですか。でも、そんなことは実際には起こらないわけですね、当たり前話ですけど、その土地その土地の文化というのがあるんですね。やっぱり人が尊敬したり大事にしてるものを簡単に否定したりするんじゃないと思います。それに第一、ある意味、今の早魃というのは地球温暖化が原因なわけですから、いわゆる先進国の被害をアフガニスタンが被っているとも言えて。ですから、文化の違いを論じる前に、共通して取り組まなくちゃいけない大事なことがあるような気がするんですね」

「なるほど。ただまあ、暗い認識ばかり言うのは本意じゃないかもしれませんが、今ある情報を総合すると、かなり厳しいですよ。ええ、厳しいですね。恐らく英米軍も今のまま駐留するっていうのはできないでしょうね。国土の治安とか言うけれども、あの広大な山岳地帯はとて守れないですよ。ソ連軍が十万人投入してもできなかったんです。治安部隊自身がいっせ襲撃されてもおかしくない状況なんです。それこそ治安部隊を守る治安部隊が要るということになりますよ。だから、やっぱり今の筋書き通りには成り立たないんじゃないかと思えます」